6/13 Thu.

第589回 定期演奏会
サントリーホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 589 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Guest Conductor
山田和樹（首席客演指揮者）*–p.5*
KAZUKI YAMADA

ソプラノ
Soprano
アルビナ・シャギムラトヴァ *–p.8*
ALBINA SHAGIMURATOVA

コンサートマスター
Concertmaster
小森谷巧
TAKUMI KOMORIYA

伊福部昭
AKIRA IFUKUBE
SF交響ファンタジー 第1番［約15分］*–p.10*
Symphonic Fantasia No. 1

グリエール
GLIÈRE
コロラトゥーラ・ソプラノのための協奏曲
作品82［約14分］*–p.11*
Concerto for Coloratura Soprano, op. 82
I. Andante
II. Allegro

［休憩］
[Intermission]

カリンニコフ
KALINNIKOV
交響曲 第1番 ト短調［約35分］*–p.12*
Symphony No. 1 in G minor
I. Allegro moderato
II. Andante commodamente
III. Scherzo : Allegro non troppo
IV. Finale : Allegro moderato – Allegro risoluto

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
公益財団法人 花王 芸術・科学財団
協力：**アフラック**
※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

6/18 Tue.

第623回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 623 / Suntory Hall 19:00

指揮
Special Guest Conductor
小林研一郎（特別客演指揮者）*–p.6*
KEN-ICHIRO KOBAYASHI

ヴァイオリン
Violin
キム・ボムソリ *–p.8*
BOMSORI KIM

コンサートマスター
Concertmaster
小森谷巧
TAKUMI KOMORIYA

ビゼー
BIZET
歌劇〈カルメン〉 第1組曲［約12分］*–p.14*
"Carmen" Suite No. 1
I. 前奏曲～アラゴネーズ
II. 間奏曲
III. セギディーリャ
IV. アルカラの竜騎兵
V. 闘牛士

ブルッフ
BRUCH
ヴァイオリン協奏曲 第1番
ト短調 作品26［約24分］*–p.15*
Violin Concerto No. 1 in G minor, op. 26
I. Prelude : Allegro moderato – II. Adagio
III. Finale : Allegro energico

［休憩］
[Intermission]

フランク
FRANCK
交響曲 ニ短調［約37分］*–p.16*
Symphony in D minor
I. Lento – Allegro non troppo
II. Allegretto
III. Allegro non troppo

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

6/23 Sun.

第112回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール　14時開演
Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No.112 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor
大植英次 *–p.7*
EIJI OUE

ホルン
Horn
日橋辰朗（読響首席）*–p.9*
TATSUO NIPPASHI (YNSO Principal Horn)

コンサートマスター
Concertmaster
小森谷巧
TAKUMI KOMORIYA

バーンスタイン
BERNSTEIN

ディヴェルティメント［約15分］*–p.17*
Divertimento
I. セネットとタケット
II. ワルツ
III. マズルカ
IV. サンバ
V. ターキー・トロット
VI. スフィンクス
VII. ブルース
VIII. 思い出に〜行進曲　ボストン交響楽団よ、永遠なれ

パウエル
PAUER

ホルン協奏曲［約16分］*–p.18*
Horn Concerto
I. Allegro patetico
II. Andante
III. Allegro giocoso

［休憩］
[Intermission]

リムスキー＝コルサコフ
RIMSKY-KORSAKOV

交響組曲〈シェエラザード〉作品35［約42分］*–p.19*
Scheherazade, op. 35
I. 海とシンドバッドの船
II. カランダール王子の物語
III. 若い王子と王女
IV. バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破、終曲

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：横浜みなとみらいホール
後援：横浜アーツフェスティバル実行委員会（横浜音祭り2019パートナー事業）

6/13 定期 Maestro

指揮
山田和樹
（首席客演指揮者）
KAZUKI YAMADA, Principal Guest Conductor

飛躍の2年目
日本が誇る次代の旗手

©読響

2018年4月、読響首席客演指揮者に就任した世界で活躍する次代の旗手。

今年1月には、首席客演指揮者として初めて4公演を振り、そのいずれもが大きな話題を呼んだ。今回も独自のセンスが光るプログラムを披露し、新たな驚きをもたらすはずだ。

東京芸術大学指揮科で小林研一郎、松尾葉子に師事。2009年ブザンソン国際指揮者コンクール優勝を機に、ヨーロッパでのキャリアをスタートさせた。これまでにベルリン放送響、サンクトペテルブルク・フィル、パリ管、フランクフルト放送響、フィルハーモニア管、ドレスデン・フィル、BBC響、チェコ・フィルなどへ客演している。また、小澤征爾の代役として12年のサイトウ・キネン・フェスティバル松本でオネゲルの劇的オラトリオ〈火刑台上のジャンヌ・ダルク〉を振り、17年には〈魔笛〉でベルリン・コーミッシェ・オーパーにデビュー。18年にはモンテカルロ歌劇場で〈サムソンとデリラ〉を指揮して好評を博すなど、オペラでも活躍。モンペリエ音楽祭、マントン音楽祭など国際的な音楽祭にも招かれている。

スイス・ロマンド管首席客演指揮者を経て、現在はモンテカルロ・フィルの芸術監督兼音楽監督、バーミンガム市響の首席客演指揮者、日本フィル正指揮者、東京混声合唱団音楽監督、自身が学生時代に創設した横浜シンフォニエッタの音楽監督などを務めている。渡邉暁雄音楽基金音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞など受賞多数。PENTATONE、EXTONなどから管弦楽曲や合唱曲など、多数のCDをリリースしている。

6/18
名曲
Maestro

指揮

小林研一郎
（特別客演指揮者）

KEN-ICHIRO KOBAYASHI, Special Guest Conductor

炎のマエストロ
渾身のフランク

© 読響

読響が世界に誇る特別客演指揮者が、11年ぶりに演奏するフランクの交響曲などで熟達の腕を振るう。読響との演奏を熱望し、今回満を持して取り上げるだけに、情熱的な演奏に期待が高まる。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科の両科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。これまでハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任している。2002年5月の「プラハの春音楽祭」オープニング・コンサートの指揮者に東洋人として初めて起用され、〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏して絶賛された。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、民間人最高位の“星付中十字勲章”、ハンガリー文化大使の称号を授与された。11年、文化庁長官表彰受賞。13年、旭日中綬章を受章。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、群馬響ミュージック・アドバイザー、九州響名誉客演指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学およびリスト音楽院（ハンガリー）名誉教授の任にあるほか、東京文化会館音楽監督、長野県芸術監督団の音楽監督を務めている。

録音の分野では、14年4月から読響と取り組んだブラームスの交響曲全集が好評を博している。

6/23
みなとみらい
Maestro

指揮

大植英次

EIJI OUE, Conductor

世界を魅了するカリスマ
華麗なる〈シェエラザード〉

© 飯島隆

ドイツを拠点に国際的に活躍する名匠が、約16年半ぶりに読響の指揮台に上がる。濃密な音楽で世界各地の聴衆を魅了してきたカリスマの、劇的な音楽に期待したい。

1956年広島生まれ。桐朋学園で齋藤秀雄に師事。小澤征爾の招きによりタングルウッドで学び、ニューイングランド音楽院に入学。アバド、コリン・デイヴィス、マズアらのマスタークラスに参加。タングルウッド音楽祭でバーンスタインと出会い、以後世界各地の公演に同行、助手を務めた。1995年から2002年までミネソタ管の音楽監督を務め、同楽団初の欧州ツアーと日本ツアーで成功を収めた。バルセロナ響、大阪フィルの音楽監督、ハノーファー北ドイツ放送フィルの首席指揮者などを歴任。現在はハノーファー北ドイツ放送フィル名誉指揮者、大阪フィル桂冠指揮者の任にあるほか、ハノーファー音楽大学の終身正教授を務めている。

2005年に日本人として初めてバイロイト音楽祭に出演、ワーグナー〈トリスタンとイゾルデ〉を指揮して注目を浴びた。これまでにニューヨーク・フィル、シカゴ響、フランクフルト放送響、スウェーデン放送響などに客演。19年は3月にワルシャワ・フィルに招かれて成功を収め、8月にはブエノスアイレス・フィルに客演する。

録音は、グラミー賞を受賞したミネソタ管との『火の鳥』のほか、ドイツ・グラモフォンなどから多数リリース。齋藤秀雄メモリアル基金賞受賞、ニーダーザクセン州功労勲章・一等功労十字章受章。読響とは2002年12月の初登場以来、二度目の共演。

6/13
定期
Artist

©Pavel Vaan/Leonid Semenyuk

ソプラノ

アルビナ・シャギムラトヴァ

ALBINA SHAGIMURATOVA, Soprano

世界各地の聴衆を魅了するコロラトゥーラの歌姫。ウズベキスタンのタシケント生まれ。2007年チャイコフスキー国際コンクール優勝。ムーティの指揮でザルツブルク音楽祭にモーツァルトの歌劇〈魔笛〉の“夜の女王”役で欧州オペラ・デビューを飾り、話題を呼んだ。以後、同役をウィーン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、メトロポリタン歌劇場、バイエルン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、パリ・オペラ座など世界の一流劇場で歌い、絶賛されている。また、ドニゼッティの歌劇〈ランメルモールのルチア〉のタイトルロールを、ベルリン・ドイツ・オペラやマリインスキー劇場などで歌っている。これまで、メータ、フリューベック・デ・ブルゴス、ゲルギエフ、パッパーノ、ハーディングらと共演を重ねている。今回が読響初登場。

6/18
名曲
Artist

今年2月、ニューヨーク・フィルへのデビューを果たした新鋭。韓国生まれ。ソウル大学を経て米国ジュリアード音楽院に学ぶ。ミュンヘン国際コンクール最高位、ヴィエニャフスキ国際コンクール第2位、モントリオール国際音楽コンクール第2位、仙台国際音楽コンクール最年少入賞など多数の受賞歴を誇る。これまでにカスプシク、ズヴェーデン、リントゥ、オルソップらの指揮で、バイエルン放送響、北ドイツ放送響、モントリオール響、ワルシャワ国立フィル、フィンランド放送響、ヘルシンキ・フィルなどと共演している。今夏にはルツェルン音楽祭、ラインガウ音楽祭などに出演する。CDをワーナー・クラシックスとドイツ・グラモフォンからリリースしており、いずれも好評を博している。読響とは17年8月以来、2度目の共演。

©Jaeyoung Heo

ヴァイオリン

キム・ボムソリ

BOMSORI KIM, Violin

© 読響

ホルン

日橋辰朗（読響首席）

TATSUO NIPPASHI (YNSO Principal Horn)

卓越した美音と技巧、しなやかな音楽性をもつ読響が誇る若き実力派。1988年東京生まれ。東京音楽大学卒業。日本管打楽器コンクール第1位、日本音楽コンクール第1位など受賞多数。2007年から11年まで小澤征爾音楽塾オーケストラメンバーを務めた。10年、NHK-FM「リサイタル・ノヴァ」に出演。木曽音楽祭、東京・春・音楽祭などにも多数出演している。マイスターミュージックからCD『プーランク：六重奏曲』『アルファ〜ホルン・オリジナル作品集〜』をリリース。ホルンを後藤照久、井出詩朗、水野信行の各氏に師事。13年4月から日本フィル首席ホルン奏者、15年4月から読響首席ホルン奏者を務め、世界的マエストロからの信頼も厚い。紀尾井ホール室内管メンバーを務めるほか、ソロや室内楽でも活躍。今回、ソリストとして読響と初共演する。

6/23
みなとみらい
Artist

伊福部昭
SF交響ファンタジー 第1番

伊福部昭（1914〜2006）は、北海道釧路に生まれ、北海道帝国大学（現・北海道大学）農学部を卒業した。独学で作曲をはじめ、1935年に最初の管弦楽曲〈日本狂詩曲〉でチェレプニン賞第1位を受賞、一躍注目を集めた。東京音楽学校（現・東京芸術大学）や東京音楽大学で教鞭（きょうべん）を執り、芥川也寸志（あくたがわ やすし）、黛敏郎（まゆずみとしろう）、矢代秋雄（やしろあきお）ら、多くの作曲家を育てた。伝統的な日本音楽に根差した旋律やリズムによる民族主義的な音楽で知られるが、クラシックのみならず、早くから映画音楽や舞台のための音楽を多数手がけ、それらの音楽は多くの人たちに広く愛されている。

〈SF交響ファンタジー〉は、伊福部が東宝の特撮映画のために書いた音楽を演奏会用に編曲したもので、1983年に第1番から第3番まで作られた。伊福部の映画音楽の代表作といえば1954年の第1作から作曲を手がけた『ゴジラ』である。そのタイトル・テーマは、映画ファンならずとも誰もが耳にしたことがあるだろう。4/4拍子と5/4拍子が交替し、シンプルな旋律が規則的なアクセントでリズムを強調して反復することで、圧倒的な臨場感と迫力を作り上げている。

第1番は、6本の映画音楽の旋律が用いられ、切れ目なく演奏される。開始（アダージョ・グロッテスコ）はゴジラの動機が低音で力強く示され、同音反復の間奏部を経て、有名な『ゴジラ』のタイトル・テーマ（ピウ・モッソ・アレグロ）に入る。その後は、『キングコング対ゴジラ』のタイトル・テーマ、『宇宙大戦争』の夜曲、『フランケンシュタイン対地底怪獣』のバラゴンの恐怖、『三大怪獣 地球最大の決戦』のゴジラとラドン、『宇宙大戦争』のタイトル・テーマ、『怪獣総進撃』のマーチと続き、『宇宙大戦争』の戦争シーンで結ばれる。コントラファゴットやチューバなど低音管楽器を充実させ、規則的なリズムを打楽器で刻み、効果的なオーケストレーションで、各楽器が華やかに活躍する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1983年／初演：1983年8月5日、東京／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、トムトム、コンガ、銅鑼）、ハープ、ピアノ、弦五部

グリエール
コロラトゥーラ・ソプラノのための協奏曲 作品82

19世紀ロシア音楽の伝統を継承する作曲家レインゴリド・グリエール（1875〜1956）は、モスクワ音楽院でイッポリトフ=イヴァーノフらに師事した。1900年に音楽院を卒業後、グネーシン音楽学校で教える一方、タネーエフの紹介で、少年プロコフィエフに作曲の基礎を指導するなどした。キエフ音楽院の作曲科教授、さらに院長を経て、1920年からモスクワ音楽院の作曲科教授を長らく務めた。

多作な作曲家で、3曲の交響曲、バレエやオペラの舞台作品、ピアノ曲や様々な編成の室内楽曲などを残している。ロシアの伝説の英雄を主人公にした叙事詩を題材にした交響曲第3番〈イリヤー・ムーロメツ〉（1909〜11）や、中国で起きた民衆革命をテーマにしたバレエ〈赤いけし〉（1926〜27）などが代表作で、色彩感のあるオーケストレーションと叙情的な旋律で広く親しまれてきた。

〈コロラトゥーラ・ソプラノのための協奏曲〉は、1943年の作品。テキスト（歌詞）はなく、装飾的で技巧的な歌唱を披露するソプラノ歌手のために書かれた。歌詞のない歌曲といえば、ラフマニノフの〈ヴォカリーズ〉（1915）が有名だが、協奏曲として書かれた作品は、この曲以外知られていない。全体は2楽章から成り、オペラにおけるシェーナとアリアのような、ドラマティックな構成となっている。

第1楽章　アンダンテ、ヘ短調、4/8拍子　弦楽器が静かに揺れ動き、クラリネットに導かれてソプラノ独唱が、憂いを帯びた旋律をロマンティックに歌う。高音からなだらかに下行する音型が波打ち、最弱音で結ばれる。

第2楽章　アレグロ、ヘ長調、3/4拍子　音楽の表情は一転し、ワルツのリズムにのった溌剌（はつらつ）とした明るい音楽となり、ハープの分散和音を伴奏にソプラノ独唱が声を輝かせる。連続する高音や広い音程の跳躍、長いトリルなど様々な技巧が表現力豊かな音楽とともに披露される。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1943年／初演：1943年5月12日、モスクワ／演奏時間：約14分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、ティンパニ、打楽器（トライアングル、グロッケンシュピール）、ハープ、弦五部、ソプラノ独唱

カリンニコフ
交響曲 第1番 ト短調

チャイコフスキーに才能を高く評価されながらも、若くして世を去ったヴァシリー・カリンニコフ（1866〜1901）は、グラズノフ（1865〜1936）と同世代の、19世紀後半のロシアの作曲家である。その人生は、貧困と病気に苛（さいな）まれ、苦労の連続であった。

1884年にモスクワ音楽院に入学するが、経済的な理由から数か月で退学を余儀なくされ、モスクワ・フィルハーモニー協会の音楽学校に移った。それでも生活は厳しく、劇場の楽団でヴァイオリンやファゴット、ティンパニを演奏して糊口（ここう）を凌（しの）ぎ、勉強を続けた。学生時代の89年には交響詩〈妖精たち〉がモスクワで初演され、才能の芽は開花しつつあった。92年の卒業と同時に、チャイコフスキーからモスクワのマールイ劇場の指揮者に推薦され、翌年には同地のイタリア歌劇場の副指揮者に就任したが、深刻な肺結核に冒され断念。その後は温暖な気候のクリミアに移住し、友人たちから経済的な援助を受けながら創作活動を続けた。

交響曲第1番は、1894年から翌年にかけて作曲された。完成したものの、経済的に余裕のないカリンニコフは、妻とともにみずから総譜やパート譜を浄書し、各都市の演奏団体に送るが、演奏を拒否されてしまう。97年にようやくキエフで、ヴィノグラツキー指揮によるロシア音楽協会の演奏会で初演された。それは、大成功を収め、アンコールで中間の二つの楽章が演奏されたという。ほどなくしてモスクワで再演された後、ウィーン、ベルリン、パリでも演奏され、束の間の幸福を味わった。楽譜も出版され、作品は友人の評論家クルグリコフに献呈された。

全体は4楽章構成で、民謡風の旋律や軽快なリズム、エネルギーに満ちた力強い音楽である。荒削りゆえにリムスキー＝コルサコフから酷評されたが、洗練とは対極にあるストレートな表現は、まさにカリンニコフの個性である。

第1楽章　アレグロ・モデラート、ト短調、2/2拍子　ソナタ形式。弦楽器のロシア民謡風の第1主題で開始され、この主題が様々なかたちで反復される。続いて、大らかで叙情的な第2主題が、ホルン、ヴィオラ、チェロに現れる。クラリネットに導かれて長大な展開部となり、その後半では第1主題が対位法的に処理される。オーボエとファゴットの二重奏から再現部となり、終結部でオーボエが第1主題を奏するのも印象的である。

第2楽章　アンダンテ・コモダメンテ、変ホ長調、3/4拍子　3部形式。夢と現実の間でまどろむような音楽。ハープとヴァイオリンの反復音型にのせて、落ち着いた主題がイングリッシュ・ホルンとヴィオラに現れる。中間部（ピウ・モッソ、ロ長調）は弦楽器のピッツィカートの伴奏でオーボエが憂いを帯びた旋律を歌い上げ、起伏をもって広がる。主部（テンポ・プリモ）が戻り、反復音型が最弱音を導く。

第3楽章　スケルツォ：アレグロ・ノン・トロッポ、ハ長調、3/4拍子　複合3部形式。オクターヴ跳躍で始まる決然とした主題と素朴な主題が交替する。中間部（モデラート・アッサイ、イ短調）はバグパイプ風の同音反復の低音に支えられ、オーボエの鄙（ひな）びた旋律で始まり、フルートやクラリネットも活躍する。快活な主部が戻り、全楽器の力強い和音で結ばれる。

第4楽章　終曲：アレグロ・モデラート、ト長調、2/2拍子　ソナタ形式。第1楽章第1主題による序奏に続き、主部（アレグロ・リゾルート）は勢いをつけて明るく開放的な第1主題で始まり、のびのびとした第2主題はクラリネットに現れる。自由な展開部には第1楽章第2主題も現れ、両端楽章の結び付きが強調される。再現部では第1主題が中心となるが、変ホ長調に転じて第2楽章の主題が金管楽器で奏される。長大な終結部（アレグロ・コン・ブリオ〜マエストーソ、ト長調）は鮮やかな色彩で盛り上がり、再び第2楽章の主題が金管楽器でコラール風に響き渡り、堂々と締めくくられる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1894〜95年／初演：1897年2月20日（旧ロシア歴8日）、キエフ／演奏時間：約35分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、ハープ、弦五部

ビゼー
歌劇〈カルメン〉第1組曲

世界中の歌劇場がレパートリーに加え、名作オペラの人気投票をすればおそらく上位にランクインするであろう、ジョルジュ・ビゼー（1838〜75）作曲の〈カルメン〉。この作品が1875年3月にパリのオペラ=コミック劇場で初演された際には不評を買い、周囲からの依頼を受けて大幅な改訂を決意したことなど、現在の人気からは考えられないほどだ。しかし、ビゼーはそれを実現することなく同年6月の上旬に天へと召されてしまったため、この作品の成功を見ることはなかった。後に友人の作曲家エルネスト・ギローが引き継いで改訂し、現在のような人気を得たというわけだ。

劇場で好評を博すのと並行し、この歌劇を人気作品へと押し上げたのは、ギローが魅力的な前奏曲、間奏曲、アリアなどをピックアップしてコンサート用に構成した組曲の存在である。さらに音楽学者のフリッツ・ホフマンが二つの組曲として再構成・出版し、今日のような人気を得た。ビゼーは歌劇の舞台となるスペインの文化・風俗や、主役であるカルメンがロマの血を引くといった要素を音楽にも反映。そのために異国情緒豊かな旋律やリズムがふんだんに使われ、聴き手の好奇心を刺激して人気作に押し上げたともいえるだろう。

第1組曲は六つの小品から成る。幕開けは物語の悲劇的なラストシーンを予感させるような**「前奏曲」**（歌劇では、第1幕への前奏曲後半）で始まり、そのままタンブリンが華麗にリズムを刻む**「アラゴネーズ」**（第4幕への間奏曲）へ。続く**「間奏曲」**（第3幕への間奏曲）は、フルートによる旋律がシリアスな物語の中で一服の清涼剤のような役割を果たす。**「セギディーリャ」**は、カルメンが純真なドン・ホセ伍長を誘惑するアリア。ファゴットの響きが印象的な**「アルカラの竜騎兵」**（第2幕への間奏曲）を経て、ヒーローである闘牛士たちを人々が讃える**「闘牛士」**（第1幕への前奏曲前半）へと続く。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1873〜74年／初演（オペラ）：1875年3月3日、パリ／演奏時間：約12分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン）、ハープ、弦五部

ブルッフ
ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調 作品26

19世紀のドイツ音楽はクラシック音楽史の中でも大変に充実しており、現代のコンサートで人気を得ている作曲家・作品も数多い。19世紀中盤からはシューマンやブラームスを中心とする伝統継承派と、新しい時代の音楽創造を模索したリストやワーグナーらによる未来志向派が両雄となって音楽シーンを盛り上げたが、そうした中でドイツ西部のケルンに生まれたマックス・ブルッフ（1838〜1920）は、やや地味な存在となっているかもしれない。ベートーヴェンやメンデルスゾーンらの知遇を得たフェルディナント・ヒラーや、メンデルスゾーンらの教えを受けたカール・ライネッケに師事し、伝統継承派の系譜に身を置いて作曲活動を続けたブルッフだが、残念なことに現在では残された作品のごく一部だけが繰り返し演奏されているに過ぎないのだ。そうした中、ヴァイオリン協奏曲第1番は人気作の筆頭であり、若い奏者が音楽コンクールなどで演奏するケースも多いほど親しまれている。

初稿は1866年4月に一度初演されたが、ブルッフは間を置かずして改訂稿の作成に着手。現在演奏されている楽譜は、ブラームスの盟友でもあったヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムの協力の下で完成し、そのヨアヒムが独奏者を務めて初演されている。伸びやかな旋律、華麗な演奏技巧、表情豊かな音楽は当時のスター・ヴァイオリニストたちを刺激し、現在へとつながる人気を得た。全3楽章構成だが、第1楽章と第2楽章は休みなく続けて演奏される。

なお余談ではあるが、ブルッフはベルリンの芸術アカデミーなど権威ある学校で作曲を教え、多くの門下生を輩出した。その中には日本の西洋音楽黎明（れいめい）期を支えた山田耕筰がいたことを付記しておこう。

第1楽章　「前奏曲」アレグロ・モデラート、ト短調。
第2楽章　アダージョ、変ホ長調。
第3楽章　「終曲」アレグロ・エネルジコ、ト長調。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1864〜66年（1867〜68年改訂）／初演（改訂稿）：1868年1月5日、ブレーメン／演奏時間：約24分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

フランク
交響曲 ニ短調

現在のベルギー王国（当時はネーデルラント王国）にあるリエージュの街で生まれ、1835年以降はフランスのパリを拠点として音楽活動を続けたセザール・フランク（1822〜90）。卓越したパイプ・オルガン奏者としても活躍したフランクは、J.S. バッハをはじめとするバロック時代の音楽も熱心に研究し、その堅牢（けんろう）な構成感や対位法などの作曲技法を自作に応用。さらには新しい時代の音楽を模索する中でワーグナーより多大な影響を受け、多様な転調や半音階を駆使した和声進行などを活用している。同じ時代を生きたサン＝サーンスやフォーレ、エルネスト・ギローら多くの音楽家と共に旗揚げした「フランス国民音楽協会」でも中心的な役割を担い、多くのフランス音楽作品を広く紹介したことも特筆すべきだ。

60代中盤になって作曲した交響曲は、1830年にパリで初演されたベルリオーズの〈幻想交響曲〉や1886年にロンドンで初演されたサン＝サーンスの交響曲第3番〈オルガン付き〉などと並び、ひとつの主題や動機（モティーフ）が変容を遂げながら全曲を支配するという作曲技法「循環形式」の好サンプルだといえるだろう。中心となる主要動機は第1楽章冒頭、低音弦楽器によって神秘的な雰囲気で演奏され、音楽が活気を帯びると明確な形で提示される。この動機が様々な形となって第2楽章、第3楽章にも顔を出し、全曲の統一を図っている。

第1楽章　レント〜アレグロ・ノン・トロッポ、ニ短調。序奏に続く主部では、主要動機のほか、寄せては返す波のような動機、輝かしいコラール風の動機なども提示される。

第2楽章　アレグレット、変ロ短調。スタンダードな4楽章形式の交響曲における緩徐（かんじょ）楽章とスケルツォを融合したようなスタイル。

第3楽章　「終曲」アレグロ・ノン・トロッポ、ニ長調。第1および第2楽章の動機が回想されて、全曲の統合を図る。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1887〜88年／初演：1889年2月17日、パリ／演奏時間：約37分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハープ、弦五部

バーンスタイン
ディヴェルティメント

本日の指揮者、大植英次にとってこの〈ディヴェルティメント〉は、師レナード・バーンスタイン（1918〜90）の作品であるのみならず、アメリカのタングルウッド・ミュージック・センターへ招いてくれた小澤征爾が初演した作品でもある。ふたりの恩師ゆかりの作品ということになる。

曲はボストン交響楽団創立100周年の委嘱作として書かれた。ボストンの頭文字B（シ）と100周年（Centennial）の頭文字C（ド）の二つの音からなるモティーフが全編にわたって登場する。曲は八つの部分から構成される。

第1曲　セネットとタケット　シェイクスピア劇における入場の合図（セネット）とファンファーレ（タケット）に由来。

第2曲　ワルツ　チャイコフスキーの〈悲愴〉には5拍子のワルツが登場するが、こちらはバーンスタイン得意の7拍子。変則的な拍子だが音楽の流れは驚くほど自然だ。

第3曲　マズルカ　ショパンの作品でおなじみのポーランドの民俗舞踊に由来する哀歌。オーボエがベートーヴェンの〈運命〉の小カデンツァを引用する。

第4曲　サンバ　華やかだが、ぎこちないダンス。一種のギャグ・シーンか。

第5曲　ターキー・トロット　こちらもダンス・ナンバーで、題は20世紀初頭に流行した初期のラグタイムを指す。いっそうコミカルに。

第6曲　スフィンクス　弦楽器のみの小さな橋渡し的な音楽。シューマンの〈謝肉祭〉中に登場する同名の曲を連想させる。

第7曲　ブルース　一気にナイトクラブ風に。ボストンの夜は更ける。

第8曲　思い出に〜行進曲 ボストン交響楽団よ、永遠なれ　フルート三重奏による先人たちへの思い出に捧げる音楽に、パロディ調の陽気な行進曲が続く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1980年／初演：1980年9月25日、シンフォニー・ホール、ボストン／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ（ユーフォニアム持替）、ティンパニ、打楽器（大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、鐘、ウッドブロック、木魚、マラカス、コンガ、ボンゴ、キューバ・カウベル、ギロ、サンドペーパーブロック、トラップセット、銅鑼）、ハープ、ピアノ、弦五部

パウエル
ホルン協奏曲

チェコの作曲家イルジー・パウエル（1919〜2007）の名は、決して日本では有名とはいえないだろう。プラハ音楽院とプラハ芸術アカデミーで学んだ後、音楽教育に携わり、さらにチェコスロヴァキア作曲家ユニオンやプラハ国民劇場、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団など様々な音楽団体で芸術監督等の要職を務め、マネジメントの分野で長年にわたって活躍した。そのかたわらで作曲家としても旺盛に活動し、オペラや歌曲、管弦楽曲などの分野に150以上もの作品を残している。自国の作曲家であるマルティヌーと並んで、ショスタコーヴィチ、ブリテンを称賛していたというが、マルティヌーからの影響は本作品にもうかがえる。社会主義体制下で活躍した人だけあって、作風は同時代の西欧のモダニズムから一線を画した新古典主義的な傾向が強い。協奏曲としては、このホルン協奏曲のほかにファゴット協奏曲やトランペット協奏曲を書いており、協奏作品のレパートリーが比較的少ない楽器に作品を提供しようと考えていたようだ。近年このホルン協奏曲がたびたび演奏されているところを見ると、狙いは成功を収めたといってよいだろう。

第1楽章　アレグロ・パテティコ　独奏ホルンの決然とした上行音型の主題で開始される。4分の4拍子を基本としつつも、目まぐるしく拍子を交替させながら、推進力あふれる楽想がくりひろげられる。

第2楽章　アンダンテ　叙情的な緩徐楽章。木管楽器とティンパニによる寂寞（せきばく）とした前奏に続いて、独奏ホルンによる悲痛な主題が奏でられる。終結部ではチェレスタが加わって神秘的な雰囲気を醸（かも）し出す。

第3楽章　アレグロ・ジョコーソ　喜びにあふれたフィナーレ。独奏ホルンが縦横無尽に活躍し、華麗に曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1957年／初演：不明／演奏時間：約16分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（小太鼓、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、木魚）、チェレスタ、弦五部、独奏ホルン

リムスキー＝コルサコフ
交響組曲〈シェエラザード〉 作品35

『千一夜物語』（アラビアンナイト）に収められた「船乗りシンドバッドの冒険」や「アラジンの魔法のランプ」「アリババと四十人の盗賊」などの物語は、だれもがどこかで見聞きしたことがあるだろう。1704年にガランのフランス語訳によってヨーロッパに『千一夜物語』が紹介されると、このイスラム世界の物語集はヨーロッパの人々に強烈な印象を与え、爆発的な人気を獲得することになった。たちまち各国語への翻訳が進み、1763年にはロシア語訳版も刊行されている。

このめくるめく『千一夜物語』の世界をオーケストラで表現したのが、ロシアの作曲家ニコライ・リムスキー＝コルサコフ（1844〜1908）の代表作、交響組曲〈シェエラザード〉である。管弦楽法の大家として知られるリムスキー＝コルサコフだけあって、二管編成のオーケストラとは思えないほどの豊かな色彩感により、異国情緒にあふれた絢爛（けんらん）たる音絵巻が描かれる。

この曲では、『千一夜物語』の基本構造がそのまま踏襲されている。つまり、外枠の大きな物語のなかで、多数の小さな物語が語られる。外枠の物語はこんなあらすじだ。シャリアール王は妃が奴隷たちと不貞を働いていることを知る。傷心の王は女性不信に陥り、妃と奴隷たちを処刑する。そして毎夜、生娘を呼び、一晩過ごしては翌朝に首をはねる残虐な暴君に成り果てる。あるとき、大臣の娘シェエラザードがみずから王のもとへ赴く。夜、シェエラザードは王に不思議な物語を聞かせる。「今日はここまで」と話を終えるシェエラザードに、どうしても続きを聞きたい王は処刑を思い留まる。そんな日々が千一夜続いた末に、王はシェエラザードをついに妻に娶（めと）る……。曲中では独奏ヴァイオリンがシェエラザード役を務め、総奏による荒々しく力強い主題がシャリアール王を示す。それぞれの楽章はシェエラザードが夜ごとに命がけで語る物語に相当する。

第1楽章　海とシンドバッドの船　ラルゴ・エ・マエストーソ　冒頭に荒々しく鳴り響くのがシャリアール王の主題。しとやかな木管楽器の和音に導かれて、独奏ヴァイオリンが可憐なシェエラザードの主題を奏でる。主部に入ると4分の6拍子で波打つような海と、滑るように前進する船の様子が描かれる。船乗りシンドバッドの冒険の始まりだ。

第2楽章　カランダール王子の物語　レント　ふたたびシェエラザードの主題に導かれて、新たな物語が始まる。おどけたファゴットがカランダール王子の主題を奏でる。カランダールとは人名ではなく、家族や財産を捨てて遊行（ゆぎょう）する托鉢（たくはつ）僧のこと。『千一夜物語』には托鉢僧になった王子の話がいくつかある。カランダール王子は道化者のようであるが、どこか悲哀も感じさせる。

第3楽章　若い王子と王女　アンダンティーノ・クワジ・アレグレット　若い王子と王女の夢見るようなロマンス。楽章の途中でシェエラザードの主題が現れて、物語を聞かせるシェエラザードの姿を垣間見せる。

第4楽章　バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破、終曲　アレグロ・モルト　第1楽章冒頭の荒々しい王の主題にシェエラザードの主題が応え、続いて活気あふれる祭りの情景が描かれる。祭りが最高潮に達したところで、第1楽章の海の情景に戻る。最後は高音を引き伸ばすシェエラザードの主題に、低弦のシャリアール王の主題がやさしく重なる。ついに王の傷心は癒えたのか。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1888年／初演：1888年11月3日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約42分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、銅鑼）、ハープ、弦五部

〈シェエラザード〉ソロ・ヴァイオリン

小森谷巧
（読響コンサートマスター）
TAKUMI KOMORIYA,
YNSO Concertmaster

桐朋学園ディプロマコース、ウィーン国立音大を経て、英国王立音学院の演奏家ディプロマを首席で卒業。リピツァ・ヴァイオリンコンクール、フムル国際コンクールなどで入賞。欧州各地でソロ活動を展開し、高い評価を得る。1987年東京交響楽団に入団しコンサートマスターとして活躍後、99年読響のコンサートマスターに就任。CDも多数リリース。長きにわたり室内楽、各地の音楽祭で活躍。現在、昭和音楽大学教授を務めている。

©読響